

《特別寄稿》

ある古い図書館を訪ねて

時 枝 正

今日はケンブリッジ大学トリニティ・ホール（1350 年創立）の古図書館をご案内しましょう。蔵書目的に建てられ、以来不断に使用され、引っ越さなかった図書館のうちでは、ケンブリッジで最古です。（当校の連中は「最古」というのが好きで、何でもあれこれ条件をならべて「その条件のもとでは最古」にしてしまうのです。）

[1]



まず外壁のまんなかに妙な扉が目につきます[1]。向かいに Master's Lodge（学長館）があるのですが、嘗ての学長が、中庭を冬横切るのは寒い、自分の寝室から図書館へパジャマで行きたい、と空中廊下を造らせたのです。昔の石版画にはその廊下が見えます。後世とりこわされ、跡には図書館側の扉のみ残りました。

[2]



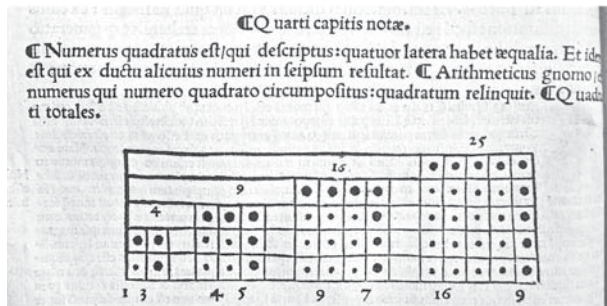
調度品はすべて図書館が建てられた 16 世紀, エリザベス朝のもののみです[2]。本は貴重品でしたから, 鎖で本棚に繋ぐのがないでした[3]。今や鎖付きの本を残している所は稀です。

[3]



見台の展示本はエラスムス『箴言』(1523) および Faber の『アリストテレス自然学註解』*Paraphrases in Aristotelis philosophiam naturalem* (1512), 大学の教科書で, 西洋印刷術初期の作品です。けしからぬことに少なからず落書——尤もラテン語の落書——されておりま

[4]



ルネサンスの学生の履修事項の例を挙げましょう。奇数をどんどん足してゆくと, 和は必ず平方数になることをご存知ですか? $1+3=2\times 2$, $1+3+5=3\times 3$, $1+3+5+7=4\times 4$, 等。[4]はその証明です。左下にまず 1 つ点を置き, それを上から右にかけて 3 つの点で囲み, その外を更に 5 つの点で囲むと, ほら, 3×3 の正方形ができる。(語源的意味で) evidens ではありませんか。

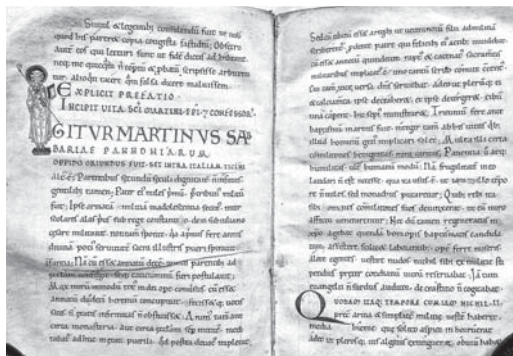
一つご注意。

[5]

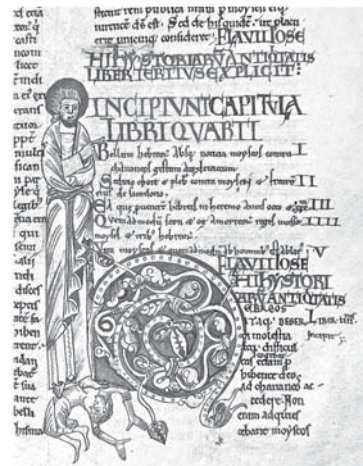


写真[5]の左上, *Paraphrases* の裏表紙はどうも変ですが, これが何だかお判りになるかしら? 実は写本の一葉が貼付けてあるのです。(ちなみに下の棚に見えるのはエラスムス全集。)印刷術の初期人々は, 新時代だ, もう写本など要らぬとばかり, 写本を印刷物の表紙の材料としてリサイクルし始めました。後悔して写本を再び大切に保存するようになったのは暫く経ってからのことです。したがって, 一部印刷物の表紙としてしか伝わっていない写本はままあります。現今, 電子版の時代には紙の本は要らぬ, という議論は, 500 年昔の議論のむしかえしな訳です。歴史は鑑。

さて写本を紹介します。



[6]



[7]

[8]



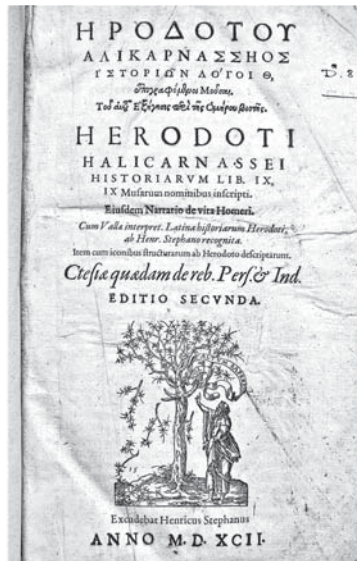
長老は *Vita S. Martini* (St Martin de Tours), 紀元 1000 年頃の聖人伝[6]です。聖マルタンが *Igitur* の頭文字に化けました。文芸的価値は同時代の『源氏物語』などと比べるべくもありませんが、羊皮紙に書いたのは強みで、驚く程きれいな保存状態で今日まで伝わりました。仮に『枕草子』の原冊子が発見されたらと想像してごらん下さい。国文学者には喉から手のでる・・・その点西洋の古典学者は恵まれています。[7]は 100 年ばかり下ったヨセフス『ユダヤ戦記』。それからボエティウス『哲学の慰み』[8]。ユーモラスな挿絵が各頁を飾る 1400 年頃の写本 (*moyen français*) で、色刷りで掲載できないのが残念です。写真の頁は『イリアス』『オデュッセイア』にちなみ、ギリシャ戦士がトロイアを攻めている場面と、オデュッセウスがポリュフェモスの眼をつぶす場面。そろって中世の騎士のいでたちなのが奇観ですね。

[9]



紀元 598 年、ローマから派遣された初代カンタベリー司教アウグスティヌス（教父 A. Hipponensis とは別人）がイギリス初の修道院を創立します。1538 年悪名高きヘンリー 8 世によるとりつぶしの憂き目を見るまで栄えましたが、その修道院の記録が[9]、やはり 1400 年頃の写本です。完全な形では現在ここにしか残っておりません。

写本は金庫にしまいまして、印刷物へ移りましょう。人文主義を支えた縁の下の力持ちは、ベネチアの Aldo 家とかパリの Estienne 家とか、錚々たる出版者たちでした。



[10]



[11]

[10]は後者の Henri, 祖父ではなく孫の方、が出したヘロドトス第2版（1592）です。中の体裁は[11]。ギリシャ語の連字がみずみずしい。4巻42節——前600年頃、ファラオ・ネコスの命を受けたフェニキア船が紅海からリビア（＝アフリカ）を3年かけて周航しヘラクレスの柱（＝ジブラルタル）を通過して帰還した、そして「私には信じ難いことであるが」周航中太陽が右手にあったと報告した——というくだりです。歴史の父には信じ難かった、しかし書きとめてくれたこの一句 τὸν ἥλιον ἔσχον ἐς τὰ δεξιὰ のおかげで、2600年後の我々はフェニキア人の周航を検証できるのです。なぜなら南半球では正午の太陽が右手、すなわち北に位置すると悟っていた人は当時北半球にはいなかったでしょうから。ここは南半球に言及した史上最古の文章だと思います。なお、[10]はギリシャ語原文、ラテン語対訳だけで、criticus apparatus（原文の綿密な比較考証）はまだ一切ありません。しかるに100年後になると既に、criticus apparatus が各頁の半分を占める版が出てきます。それだけ人文主義者たちが研鑽を積んだ証左でしょう。

1500年以前にヨーロッパで印刷された本を incunabulum と称します。その一例、シェーデル『ニュルンベルク年代記』（1493）を開きましょう。

[12]



incunabula の中でも現存数最多（約 1250 冊）、世間で目にする確率が高い品です。ベネチアの挿絵[12]はもと観光案内用に描かれたのを転載したそうです。

紀元 100 年頃アレクサンドリアで活躍した天文学者プトレマイオスは地理学者でもありました。その大作『地理』は、イスラム経由で 1300 年頃東欧へ、1400 年頃西欧へ伝わり、改訂・増補を重ね流布しましたが、大航海時代に至って科学的な地図帳にとってかわられました。[13]は最終に近い版、1513 年版のイギリス諸島の頁です。

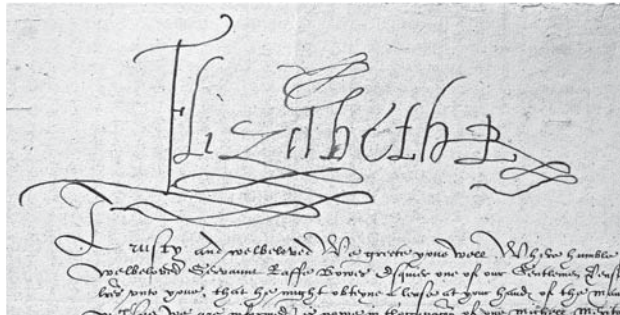
[13]



海岸線がずいぶんいいかげんですな。それに、アイルランドの西の沖をよく見ると、ちょこんと、当時「発見」されたばかりの「島」ブラジルが載っています。

16 世紀末にはイギリスが制海権を握ります。その立役者、エリザベス 1 世はどんな署名をしていたのでしょうか？

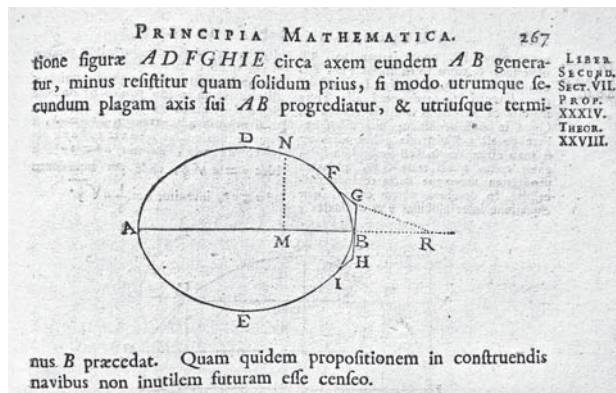
[14]



z と R (Regina 女王) のしっぽがひよいひよいとつづらに折れ, ab のあたまには帽子みたいなものをかぶらせています[14]。1587年9月2日付, 女王は54歳, トリニティー・ホールに借地を要請する手紙です。貸してあげたかどうかは知りません。

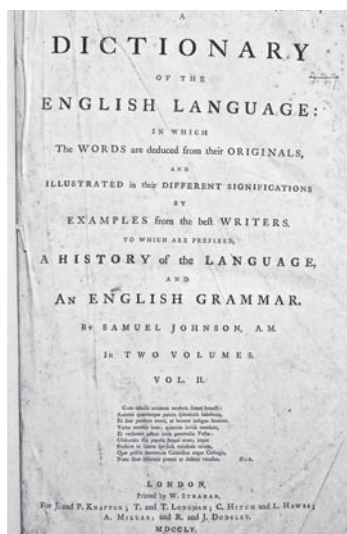
そろそろ近世にさしかかって参ります。日本では江戸時代。西欧での同時代の象徴として二つの本を覗きましょう。一つはニュートン『プリンキピア』(1687)です。

[15]



『プリンキピア』1巻は力学の基礎, 3巻は天文への応用, 古典中の古典です。他方2巻はめったに読まれません。2巻は抵抗の理論, 特に流体力学の試案でして, 成功していないのです。但しその中にも, ここそこ大当たりが埋もれている。例えば2巻7部は, 流体の抵抗を最小にするような物体の形の考察です。流線形, すらりとして先がとがった形, が思い浮かびますね。けれどニュートンは, なんと先をひしゃげて進行方向に直角な面を置け, と結論したのです[15]。これは実験にも常識にも反しており, 300年の間「2巻の誤謬」シンデレラ扱いを受けてきました。ところが, 最近になって, 流体が普通の水や空気ではなく希薄ガス(例えば高層圏)のばあい, この結論が現実味を帯びることが見つかりました。従来の数学(変文法)では見えなかったのですが, 最近発達した数学(最適制御)を使ったらニュートンの結論が得られたのです。[15]下の二行に曰く「この命題は未来の造船にあたって無用ではなかろう」。

[16]



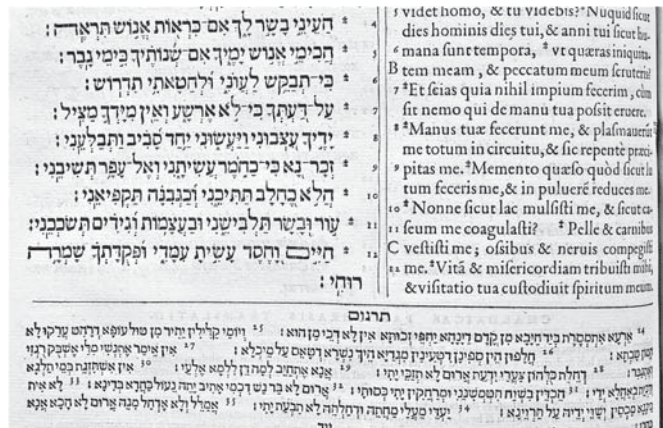
[17]

OATS. *n. f.* [*azen*, Saxon.] A grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people. It is of the grafs leaved tribe; the flowers have no petals, and are disposed in a loose panicle: the grain is eatable. The meal makes tolerable good bread. *Miller.*
The *oats* have eaten the horses. *Shakespeare.*

いま一つはジョンソン博士の『英語辞書』（1755）[16]。伝記作者ボズウェルによれば、ジョンソンはこの金字塔を単独8年で仕上げた由。やや先立ってアカデミー・フランセーズの40人が40年かけ仏語辞書を編纂したのと対照すれば、委員会仕事の能率が分かります。ただ、独りで執筆したいきおい、個人的意見も散見されます。有名な「カラス麦」の項を[17]に示しました。その定義「イングランドでは馬にくれてやるが、スコットランドでは人間の食用になる穀物」。

語彙といえばハパクス・レゴメノン ἀπαξ λεγόμενον という概念を耳にされたことおありですか？ ある言語（典型的には死語）の文献全体に一度しか現れない単語のことです。ギリシャ・ラテンにも幾つかありますが、数奇な運命を辿った例が古典ヘブライ語にございます。

[18]



それは『ヨブ記』10章10節に現れる *גבנה* (gvinah, 現代綴りでは *בבניה*), [18]の左段, 10と番号のふられた行の右から数えて4語目です。(ヘブライ語は右から左へ書く。ギリシャ語にも古くは犁耕式 *βουστροφηδόν* なんて書き方があった。) 意味は「チーズ」で, *ἄπαξ* なのですが, 19世紀末ヘブライ語が口語として復活した際採用され, 現代ヘブライ語ではありふれた単語になりおこせました。なお, 写真[18]は Complutum 系統に属する 1568 年の多言語聖書 (polyglot) で, 右段は *Vulgata*, 下段はいわゆる *targum*, アラム語での通訳です。

ケンブリッジは古書の修理・保存の専門工房を設けており, そこは技師 (conservator) と助手二人きりで大学中の注文をさばいています。技師は名を Cheese さんとおっしゃいます。トリニティー・ホールも屢々お世話になる若き匠です。

せっかく同胞相手の案内なのでから, 日本もお見せしておきましょう。

[19]



クックの南太平洋探検記念（1806）に作られた天球儀と地球儀の対（[2]の奥にも見えている）の后者に描かれた日本列島です[19]。写真上は識別困難ながら、京都の辺りに Meaco, 北海道に Jesso なんて記してあります。さっきお目にかけたプトレマイオスこのかた進歩めざましく、海岸線は不正確でこそあれ、東の沖にブラジル島はありません。

私は、この小さな図書館を見回る度に、先人がそれぞれの時代に於いて学問を継承してきた、その τέχνη μακρή (ars longa) への意欲にうたれずにはられません。日本において西洋古典に携わる皆様は、かけがえのない継承の一環を担っていらっしゃるのです。

末尾には Fellow Librarian（館長）に撮影・公表許可の礼を述べるのが筋でしょう。許可を得るため、私は自分自身宛に申請状をしたためるはめになったことを書き添えて、ご案内を終えさせていただきます。おつかれさま。



（編集メモ）

本誌の編集・発行者の私、南川は、英国のケンブリッジ大学において、同大学図書館の小山騰日本部部長によりケンブリッジ大学の伝統ある学寮、トリニティー・ホールのフェローである時枝正博士を紹介されました。そして、同博士の案内で、博士が図書館長を務めるトリニティー・ホールの図書館の素晴らしいコレクションを見せていただくことができました。感激した私は、京都大学学術出版会の西洋古典叢書の編集委員である立場から、同叢書の刊行の際に添える「月報」エッセイの執筆を同博士に依頼しました。博士は快くお引き受けくださり、たくさんの写真とともにエッセイを寄稿してくださいました。しかし、写真が

多く「月報」の通常の紙幅より長すぎたため、文章、写真ともに相当削減していただかねばならなくなりました。そこで、京都大学学術出版会の許可を得て、時枝博士に削減前の長めの原稿にさらに加筆・修正を加えて本誌に寄稿いただけないかお願いし、実現したものがこのエッセイです。「月報」のエッセイの方は、時枝正「ケンブリッジ古図書館瞥見」という題名で、ブルタルコス／ヘラクレイトス（内田次信訳）『古代ホメロス論集』西洋古典叢書付録「月報 103」（京都大学学術出版会、2013 年 10 月 31 日発行、2～5 ページ）に掲載されており、

時枝先生には幾度も御面倒をおかけしましたが、日本の読者にケンブリッジ大学の学寮の宝物について知っていただく機会が得られて、私はたいへん嬉しく思っています。改めて先生にお礼申し上げます。なお、数学者でいらっしゃる先生の御経歴を、先生御自身がお書きになられたまま、次に紹介します。（南川高志）

時枝正（ときえだただし）。1968 年東京生まれ。1974 年上野不忍画廊で二人展。ポルドーでリセ。夏、配管工見習い。点字を覚え日本で盲人にフランス語を教える。大学で古典語を専攻ののち、数学に転向。1996 年プリンストン Ph.D.。その前後 6 カ国に住む。2004 年以降ケンブリッジ大学トリニティー・ホールのフェロー、数学主任。2010 年から同図書館長。フランスやアメリカを中心に物理や数学の一般向け講演、ケープタウンの African Institute for Mathematical Sciences を基点に発展途上国での活動も多し。和文の著作としては、月刊誌『数学セミナー』に「こどもの眼・おとなの頭」連載中。2013 年～14 年はハーバード Radcliffe Fellow。